新編

國語讀本

高等小學校

兒童

T1A3
10
Ko97k

図書　和図書　遡

a1380328082a

福岡教育大学蔵書

明治三十四年八月十六日
高等小學校國語科兒童用教科書
文部省檢定濟

小山左文二郎合著
武島又次郎

新編國語讀本

高等小學校兒童用

東京　株式會社益友會

新編國語讀本高等小學校兒童用卷一目次

第一課　春　一
第二課　花ノ王　五
第三課　大和めぐり　九
第四課　運動會　十三
第五課　奇妙ナ植物　十六
第六課　野菜をおくる　二十
第七課　志の堅い少年　二十三
第八課　女子の仕事　二十八
第九課　感心なる姉妹　三十一
第十課　塵もつもれば山となる　三十五
第十一課　傳染病の話　三十七

第十二課　ジェンナー博士　四十
第十三課　須磨浦　四十三
第十四課　海綿とり　四十七
第十五課　富士登山(一)　四十九
第十六課　富士登山(二)　五十四
第十七課　遠足に友をさそふ　五十八
第十八課　小柳　六十一
第十九課　大膳なる少女(一)　六十五
第二十課　大膳なる少女(二)　六十八
第二十一課　智恵のはたらき三題　七十一
第二十二課　狐と鳥　七十六

第一課　春

一年の中で、春ほどよい時候はない。あたたかな日は、うららうらと照り、やはらかな風は、そよそよと吹いて、知らず知らず人の心をうき立たせる。

あちらこちらの山々には、櫻の花が咲きみちて、白雲がかかったよーである。

ひろびろとした野邊には、たんぽぽれん

錦

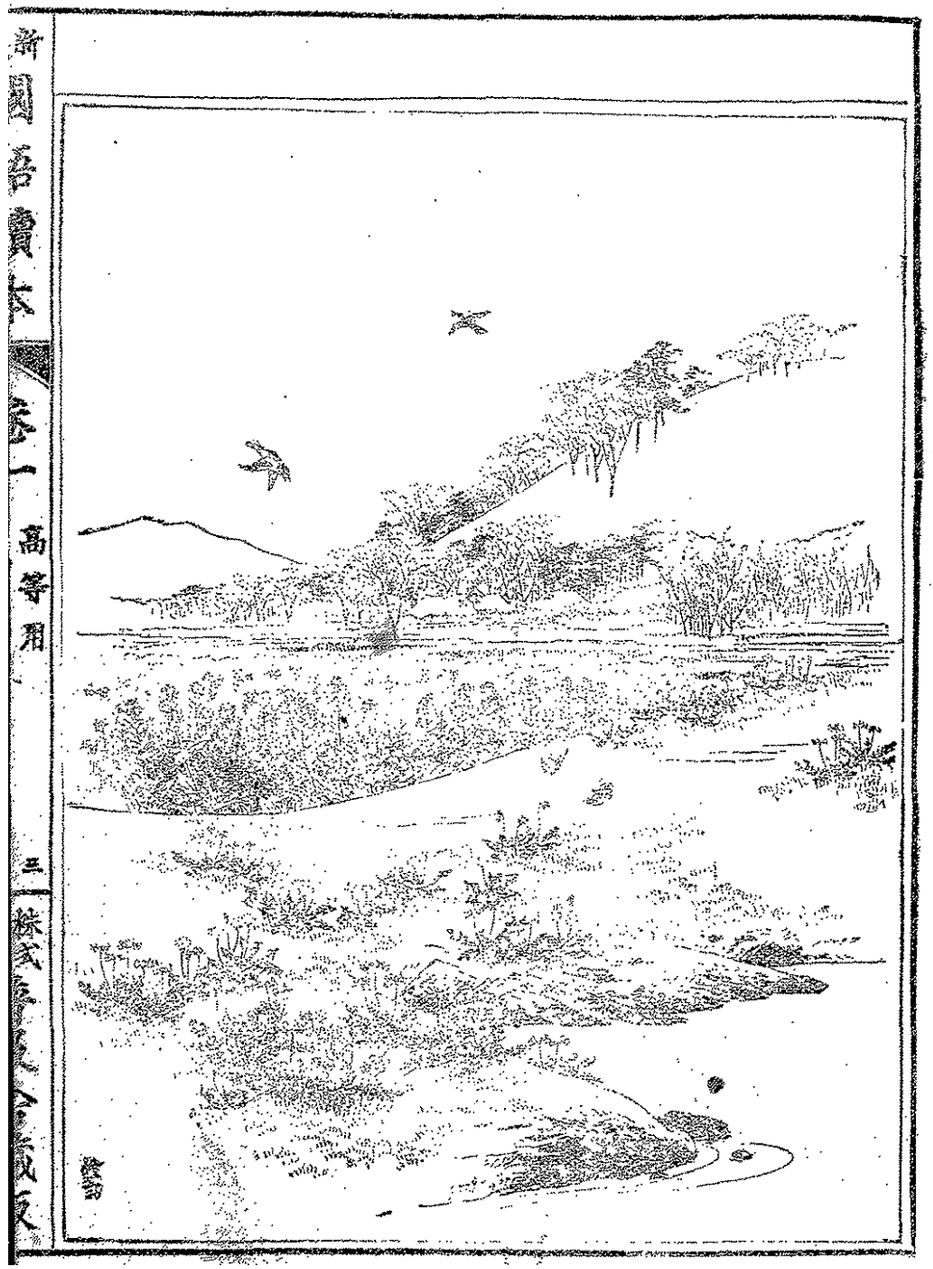
げ草などが、今を盛りと咲きみだれて、錦と見まがふばかりである。

菜

麥畑の間には、うつくしい菜の花が咲きまじって、青だたみの上に、黄色な毛せんをしいたよーである。

花の上にまひ遊ぶちょーは、のどかな春をいはふのであらうか。

雲の上にさへづるひばりは、春の景色を我等に告げるのであらうか。



蝶

ああ、ひばりの鳴くのもおもしろい。蝶のまふのもおもしろい。草木の花が、色をきそうて居るのもおもしろい。かよーにおもしろい野山の景色を見ながら、親しい友だちと野邊をあるけば、ながい春の日も、短い心地がする。

「をさない時は、一生の春だ。」といふから、我等は、十分、おもしろい遊びもし、また、十分、學問の勉強もせねばならん。

一年の春は、毎年來るけれども、一生の春は、またと來ない。この一生の春に、學問を怠ると、一生の秋に、よい實のりを見ることが出來ない。

第二課　花ノ王

櫻ハ、ワガ國ノ名花デアル。外國ニモ、櫻ハアルガ、ソレハ、實バカリッパデ、花ハ、サマデ、見ドコロガナイサウデアル。

櫻ハ、チョード、春ノヨイ時節ニサクノデ、

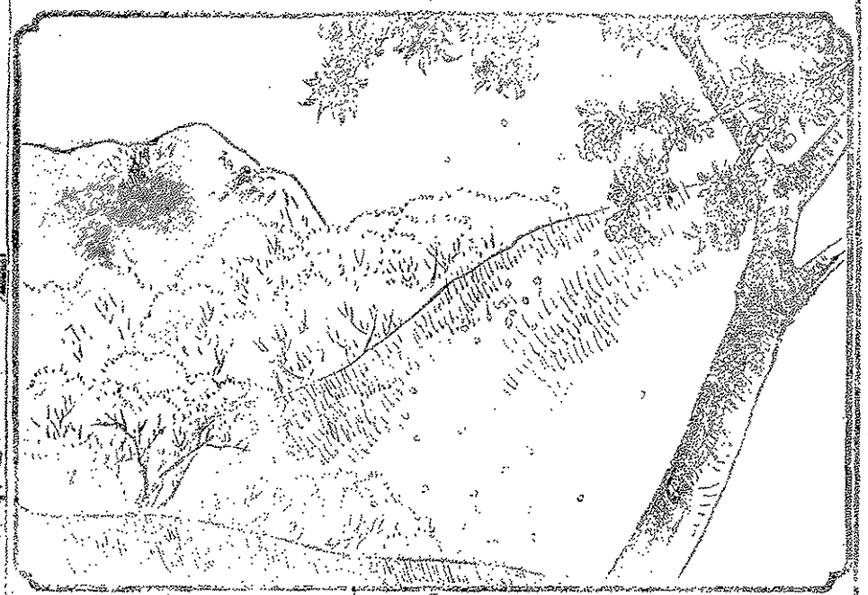
掛

見物ニ出掛ケルノニ、ゴク都合ガヨイ。ソレユエ、一年中ノ見物ノウチデ、花見ホド、人ノタクサンニ出ルモノハナイ。

櫻ノ名所ハ、大和ノ吉野山、京都ノ嵐山、東京ノ向島、上野ナドデアル。

名所ノ櫻ハ、ダイテイ、山櫻デアルガ、近頃ハ、八丈島ノ櫻ガ、ヨホド、東京邊ヘ廣マッテ來タ。

ソノ外、櫻ニハ、ヒガン櫻、ボタン櫻ナドノ



種類ガアル。ヒガン櫻ハ、三月ノ中ホドカラ咲キ、ボタン櫻ハ、オクレテ咲ク。ヒガン櫻ノ花ハ一重デ、ボタン櫻ノ花ハ、八重デアル。

櫻ノ咲キソロッテ居ルノヲ、遠クカラ眺メルト、マルデ、白雲ガ

カカッタヨーデアルガ、近ヅイテ見ルト、イクラカ、紅色ガサシテ居テ、何トモイヒヨーノナイ美シサデアル。

西洋デハ、バラヲ花ノ女王トイヒ、支那デハ、ボタンヲ花ノ王トイフガ、ワガ國デハ、櫻ヲ花ノ王ト名ヅケテキル。

カヨーニ、ワガ國ノ人ガ、櫻ヲ愛スルノハ、ソノ心ダテガ、實ニ、コノ櫻ノヨーニ、美シクアルカラデアラウ。

草木に花の咲くは、實をむすばんがためにして、花の色の美しきは、蝶・はちなどを招かんがためなり。

蝶・はちは、花より花へと、飛びうつりて、ある花の粉を、他の花のしんにつけ、實をむすぶたすけをなすものなり。

第三課　大和めぐり

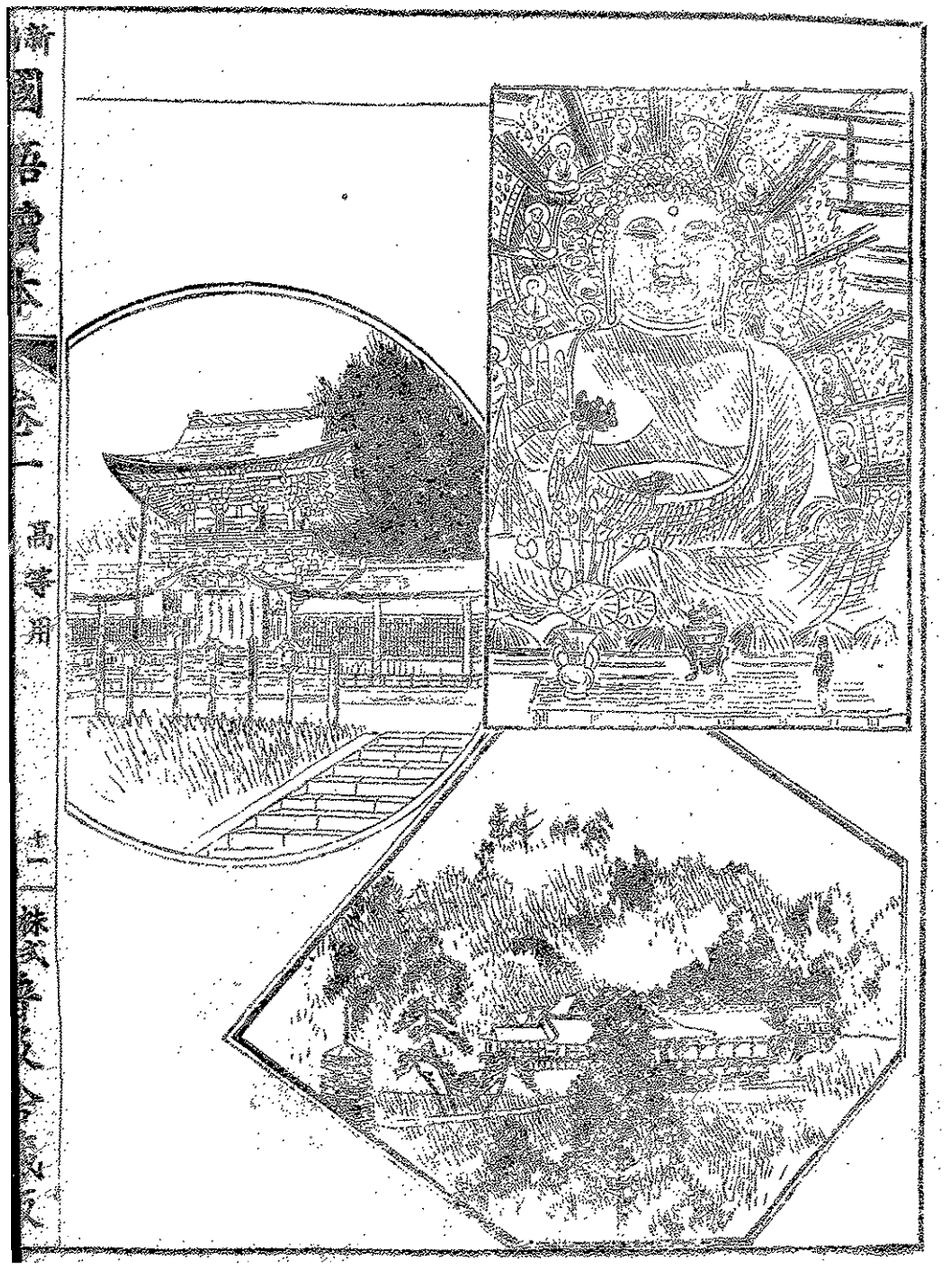
大和は、わが國にて、もっとも、名所・舊跡に富める處なれば、「大和めぐり」とて、この地に遊ぶもの少なからず。

巡訪至

大和巡りをなさんには、まづ、奈良よりはじむるをよろしとす。

奈良は、千百餘年前の帝都にして、春日神社、東大寺の大佛等のあるところなり。春の好時節、この地にゆきて、公園に遊び、これ等の名社・大寺を訪はば、そのおもしろさ、いかばかりぞや。

奈良を見終らば、南の方初瀬に至りて、名高き長谷寺の觀音にまゐるり、それより、多武



峰にのぼりて、談山神社を拜すべし。

多武峰の南に吉野山あり。

「これはこれはとばかり花の吉野山」

と、昔の人のよみたるごとく、春の頃は、滿山、花につつまれて、その美しさ、いはん方なし。

御陵

さて、山腹なる　後醍醐天皇の御所の跡、および、御陵などを拜し、それより、もとの方へたちもどりて、畝傍山のふもとなる　神武天皇の御陵を拜すべし。

運樂

幅

かくて、奈良にかへれば、これにて、主なる名所舊跡は、巡り終りたるなり。

第四課　運動會

まなびの友と手をひき連れて
ほんに樂しいての運動會
學ぶ時にはともども學び
遊ぶ時には一しょに遊べ
さても遊びの數々は
幅飛び高飛びおにごっこ

天氣のどかで風ないけふの
ほんにうれしいこの運動會
をさない時代は二度とはこない
遊ぶをりには樂しく遊べ
さても遊びの數々は
旗取り球なげかくれんぼ
日頃學びのわざなし終へて
ほんに樂しいこの運動會
弓もふだんはゆるべにゃならん
人もたまには遊ばにゃならん
さても遊びの數々は
競走馬のりすまうとり
廣い野山の景色をながめ
ほんにうれしいこの運動會
勵む時には家にて勵め
遊ぶ時には野山で遊べ
さても遊びの數々は
綱引き目かくしまり遊び

競走。

勵

綱

眠

私等ノ學校デ、キノフ、運動會ガアリマシタ。キノフハ、サイハヒ、風モナクテ、ノドカデアリマシタカラ、見物人モ、タクサンアリマシタ。

私等ハ、日ノ暮レルマデ、旗取リヤ、馬ノリヤ、ソノ外、イロイロノ遊ビヲシマシタ。

第五課　奇妙ナ植物

植物ノナカニハ、ズイブン、奇妙ナモノガアル。

マヅ、アリフレタ草木デイフト、ネムノ木ヤ、カタバミ草ハ、夕方カラ葉ヲ合セテ、眠ル

寢　遲

ヨーナフーニナル。モシ、眠ルノナラ、我等ヨリモ、大ソー、早寢トイハネバナラン。

ネムノ葉ト、ヨク似タ葉デアッテ、眠ル工合ノ少シ違ッタ草ガアル。ソレハ、ネムリ草トイフモノデ、夜、ハ、モトヨリネムルガ、人ニツツカ

柄

レルトカ、サハラレルトカスルト、畫デモ眠ル。コノ草ガネムルトキハ、葉ノ柄ヲダレテ、チョード、枯レカカッタヨーデアル。

コレ等ヨリモ、マダマダ、ズット奇妙ナ植物ガアル。モトセンゴケヲ見ナサイ。葉ノ上ニ蠅ナドガトマルト、葉ノ面ニアル數多ノ毛ガ、ハ方カラヨッテ來テ、スグニ、蠅ヲイケドッテシマフ。

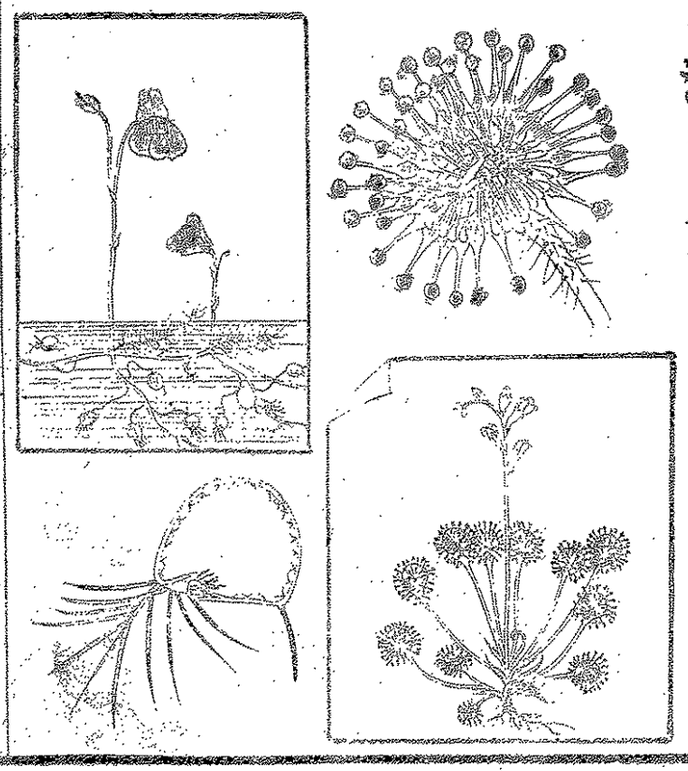
蠅

ソノ蠅ガ、グルヒジニニシヌト、モーセン

汁

ゴケハ、葉カラ水ヲ出シテ、蠅ノカラダヲトカシ、ソノウマイ汁ヲスフ。

モーセンゴケト、働ガ似テキテ、少シフーノカハッタモノニ、タヌキモトイフモノガアル。タヌキモ



逆

ニハ、小サイフクロノヨーナモノガアッテ、ソノ口モトニ、毛ガ、逆ニハエテ居ル

ソレユエ、小蟲ガ、一度、ソノフクロノ中ヘハヒコムト、モウ、出ルコトガ出來ナイデ、ダヌキモノエジキトナッテシマフ。

植物中には、ねむる、眠るものあり。眠り草・ねむの木の如きもの、これなり。また、手も口もなくして、よく、蠅などをとらへ食ふものあり。もーせんだけ・たぬきもの如きものこれなり。

第六課　野菜をおくる

豌豆。

今年は、野菜畑の手入れがゆきとどいたためか、よほど、よく出來たよーであります。野菜畑は、母と私とで手入れをすることに、父から申しつけられたゆゑ、私は、毎日、一度は、きっと見まはって、蟲などをとります。このさや豌豆は、今日はじめて、つみとったもので、まことに少しばかりでありますが、一かごさしあげます。

五月二十日　　のぶ

賞味。

野村さだ子様

返事

おめづらしいものを、たくさん下さいまして、ありがたうございます。私方でも、今年は、少しばかり、野菜をつくりましたが、何分にも、店が忙しいため、畑の手入れを怠って居たので、豌豆も、やうやう、花が咲いたくらゐであります。ちょーだいの初ものは、早速、賞味いたしませう。どうぞ、御

母上様に、よろしくお禮を申して下さいませ。

五月二十日　　さだ

志。太鼓。

第七課　志ノ堅イ少年

昔、アル國ニ、軍タイノ太鼓ウチヲシテ居タ少年ガアリマシタ。

アル日、大エンシューノアトデ、將校等ガサカモリヲ開イタ時、コノ少年モ、ソノ席ニ

席

出テ、シャクヲシテキマシタ。

ヤガテ、大將ハ「ソノ方モ、一パイ飲メ。」トイッテ、杯ヲ、コノ少年ニ與ヘマシタ。少年ハ、「私ハ、酒ヲ飲ミマセン。」トシタイシマシタ。

大將ハ、カサネテ「ソノ方ハ、一日中太鼓ヲウッテキタノダカラ、サゾ、勞レタデアラウ。一杯飲ムト、勞レガナホルユヱ、ゼヒ飲メ。」トイヒマシタ。

少年ハ、「酒バカリハ、オコトワリ申シマス」

杯

勞

副將

トイッテ、カタクジタイシマシタ。

コノ時、副將ハ、「ソノ方ハ、軍人デアリナガラ、ナゼ、大將ノ命令ニ從ハンノダ。」トキビシク少年ヲシカリマシタ。

少年ハ、ツツシン

デ、「私ハ、入營シマシテカラ、職務ヲトル上デ、マダ、一度モ、大將ノ御命令ニソムイタコトハアリマセン。シカシ、酒ダケハ、イカニ仰セラレテモ、飲ムコトハ出來マセン」ト申シマシタ。

命令

コノ時、副將ハ、聲ヲアララゲテ、「ソノ方ハ、ドウシテモ、大將ノ命令ニ從ハナイトイフノカ。然ラバヨロシイ。キッテステルゾ」ト、イヒマシタ。

戒涙

少年ハ、「マコトニ恐レ入リマシタ。シカシ、私ガ入營シマス時、母カラ、カタク、酒ヲ飲ムコトヲ戒メラレマシタ。ソレユヱ、タトヒ、キリステラレテモ飲ミマセン」ト、涙ヲ流シテ申シマシタ。

ソコデ、大將モ副將モ、キリステルドコロデハナイ、「エライ子モアッタモノダ」ト、タイソー感心シテ、コレカラ、一ソー、カハユガッテヤッタサウデアリマス。

昔、ある國に、軍たいの大鼓うちをつとめし少年ありたり。ある日、大えんしゅーの後、大將より、酒をしひられしに、「かつて、入營の時、母より、かたく、酒を戒められたれば、命にかけても、飲みがたし。」とて、じたいしたりとぞ。

第八課　女子の仕事

女子のせねばならん仕事は、たくさんあるが、その中で、何が、一番大事であるかといふと、衣服や食物に關する仕事である。

衣服は、まづ、織物を裁って縫ふことが、第一である。その外、破れるとつくろひ、よごれるとあらひ、用がすむと、たたんでかたづけ、蟲に食はれぬ手あてや、かびのつかぬ用心や、洗ひはりだの、色上げだのと、いろいろ、氣をくばらねばならん。

破

洗

食物については、まづ、穀物・野菜・肉類など、食品の性質を知らねばならん。價がやすくても、からだのために、よいものが、ずいぶんたくさんある。

穀物。

性質。

品物はよくても、料理がへたであると、味もわるいし、からだのためにもよくない。うまくてこなれもよいよーに料理するには、よほど、けいこをせねばならん。

また、絲を染めたり、はたを織ったりすることも、女子の仕事の一つである。

この外、男子よりも、女子に適してゐる仕事は、養蠶や、製絲や、紡績などである。元來、女子は、根氣がよくて、手先が器用であるから、

染

紡績

とりわけ、これらのわざに適するのである。

年々、たくさん外國へおくり出す生絲や、紡績絲が、多くは、女子の骨をりの結果であると思へば、女子のはたらきも、たいしたものといはねばならん。

結果

女子ノナスベキ仕事ハ、數多アレド、ソノ中ニテ、モットモ大切ナルハ、裁縫・センタク・料理・ハタ織等ナリ。サレバ、女子ハ、ヲサナキ時ヨリ、コレ等ノ仕事ニ心ガクルコト、カンヨーナリ。

第九課　感心なる姉妹

近江國に感心なる姉妹あり、姉をやすといひ、妹をみねといへり。

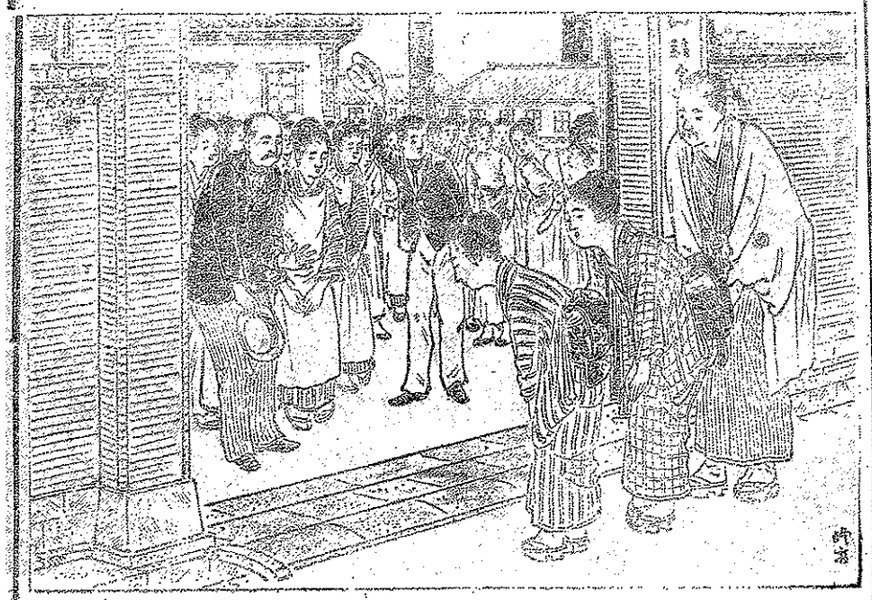
父は、服部平七とて、先祖より、宿屋を營業となし來りしが、近年に至り、旅人は、大抵、汽車・汽船にて通行することとなりたるため、その家は、ほとんど、渡世しがたくなりたり。

平七は、他の營業をせんとて、京都に出でたれども、かれこれするうちに、くらしにもさしつかへたれば、娘二人を、ある紡績會社の工女となしたり。

この時、やすは十六歳、みねは十二歳なりしが、仕事も上手にて、よくつとめ、その上、行狀も正しかりしかば、ほどなく、工女中の手本ともいはるるに至りぬ。

かかるよき工女なれば、他の紡績會社より、しきりに望まれて、つひに、その會社に入ることとなりぬ。

この時、前の會社より、積立金を受け取り



しが、一錢をも費さずして、これを銀行に預け、姉妹心を合せて、金を貯へたれば、二年ばかりの間に、二百圓ほどにつもりたり。

その後、平七の重病にて、五十圓を引き出したれど、なほ、會社より出づる時には、三百圓の預け金を受け取り、これを前の金と合せて、もとでとなし、以前の家業を始めんとて、父と共に、故郷に歸りたりとぞ。

第十課　塵もつもれば山となる

塵もつもれば山となり
露もつもればふちとなる
千里の旅もひと足の
あゆみよりすと知れよ人〻

繩

あけくれたぐる釣瓶繩
はては井桁をきりやぶり
たえずおちくる雨だれ水
つひには岩をもほりとほす」
ああ千なりのひさごさへ
ただひとすぢのつるよりど

長堤。

ああ長堤のくづれさへ
はじめは蟻の穴よりど」
我等もちひさき善つまば

蟻

やがて賢者となるべし
我等もちひさき愛つまば
やがて仁者となるべし」

第十一課　傳染病ノ話

オヨソ、病氣ノ中デ、傳染病ホド恐ロシイモノハナイ。ソレユエ、ミナ、氣ヲツケテ、傳染病ニカカラナイヨーニセネバナラン。

肺病。

傳染病トハ、コレラ・チブス・セキリ・天然痘・ヂフテリヤ・ペスト・肺病ナドノヨーナ、人カ

ラ人ニウツル病氣ヲイフノデアル。コノウ

赤痢

チ、コレラ・チブス・赤痢ナドハ、夏カラ秋ニカケテ、ハゲシクハヤルモノデアル。

傳染病ヲ防グニハ、マヅ、家ヤ著物ヤカラダナドヲキレイニシ、飲食ヲツツシマネバナラン。マタ、コレ等ノ病毒ハ、多ク、水ノ中デフエルモノデアルユエ、傳染病ノハヤルヲリニハ、モットモ、水ニ注意セネバナラン。モシ、飲ムナラ、一度煮タテタノヲ飲ムガヨイ。

病毒

注意

煮

天然痘ハ、種痘法ガ發明セラレテカラハ、ホトンド、ハヤラナイヨーニナッタ。シカシ、今デモ、種痘ヲオコタッタタメニ、コノ病ニカカルモノモアル。コレヲ防グニハ、乳ノミ兒ノ時ニハ、年々種痘シ、ソレヨリ後ハ、二年目カ三年目ニ、一度ヅツ、種痘セネバナラン。

ヂフテリヤハ、子供ノカカリヤスイ病氣デアル。モシ、コノ病氣ニカカッタモノガアッタラ、キビシク、消毒法ヲ行ッテ、ホカノ人

兒

消毒

ニウツラナイヨーニ、注意セネバナラン。

夏ノ夜、戸ヲアケタママ眠ルト、ネビエヲシテ、ソレガタメニ、傳染病ニカカルコトガアルソレユエ、カヨーナコトハ、ヨク、ツツシマネバナラン。

傳染病は、恐るべき病なれば、この病のはやるときには、ことに、飲み食ひをつつしみ、からだをきれいにし、家の内外をそーぢするなど萬事に注意して、この病にかからぬよーにすべし。

第十二課　ジェンナー博士

博士

醫師。

ジェンナー博士は、イギリス國の人なり。きぱじめ、ある醫師の弟子たりしをり、多くの人の、天然痘に苦めるさまを見て、大いにこれをあはれみ、いかにもして、この病を防ぐべき方法を研究せんと思ひ立ち、これより、もっぱら、その研究に力をつくしけり。

研究

實驗。

博士は、二十年の間、種々の實驗をつみたる後、牛痘を種ゑて、天然痘を防ぐべきことを工夫し、まづ、これを、おのれの兒にこころ

みしに、その結果良かりしかば、つひに、書を著はして、種痘法を世に公にしけり。

當時。

然るに、當時、一人として、この發明を信ずるものなく、かへりて、これをそしり、はては、種々の妨げをさへ加ふるに至りけり。

妨

されど、博士は、少しも、これを意とせず、ま

すます、その法を普及せしめんことをつとめければ、種痘をこころみんとするもの出で來りて、その法、やうやく、世に行はれ、つひに、今日の如く、世界中の人々、みな、その惠みを受くるに至れるなり。

普及

惠

第十三課　須磨浦

摂津ノ兵庫カラ、一里ホド西ノ海岸ニ、松ノ立チナランデ居ル磯山ガアル。コノ邊十餘町ノ間ヲ須磨浦トイフ。

磯山。

須磨浦ハ、北ニハ山ヲオヒ、南ニハ、瀬戸ノ内海ヲヒカヘテ居ル。内海ハ、波ガオダヤカデ、青畳ヲシイタヨーデアル。

青畳

近クニ見エルノハ、淡路島デ、遠クニツヅイテ居ルノハ、紀伊ヤ和泉ノ山々デアル。

須磨ノ景色ハ、實ニヨイ。中デモ、秋ノ景色ハ、マタ、カクベツデアル。

「見渡セバナガムレバ見レバ須磨ノ秋。」

ト古人ガホメタノハ、モットモデアル。コノ

句

首塚

句ハ、源光寺ノ庭ノ石ニキザンデアル。

源光寺ノ隣ノ須磨寺ニハ、平敦盛ノ首塚トイフガアル。コレハ、源平ノ戰ニ、平家ノ軍ガ、一ノ谷デマケテニゲルトキ、熊谷直實ガ、敦盛ヲウチ取ッテ、ソ

葬

ノ首ヲ葬ッタ塚ダトイヒ傳ヘテ居ル。

須磨ハ、モト、ゴクサビシイ處デ、リョーシノ家ガ、ココカシコニ見エルバカリデアッタガ、今ハ、汽車ノ便ガアルシ、マタ、保養ニハ、別莊ヨホドヨイ處デアルエエ、ハタゴヤヤ別莊ナドガ、白砂青松ノ間ニタチナランデキタ。

須磨浦は、兵庫より一里ばかり西の海岸にあり。千餘町の間、うちつづける松原なり。この地は、景色よく、空氣清くして、保養によろしきゆゑに、來り遊ぶものはなはだ多く、別莊はたてやなど、白砂青松の間にたちならべり。

拭

第十四課　海綿とり

太郎は、海綿にて、石板を拭ひながら、「この海綿は、何でできてしらへたものでありますか。」と母にたづねました。

「海綿は、こしらへた物ではありません。海の底に居る動物の骨であります。」

太郎は、驚いた顔をして、それを、また、どう

槍　腰

して、とったのであります。

「浅い處では、船の上から、長い槍で、岩についていてるのをつき取ります。深い處では、一人が、船に居て、綱のはしをもち、一人が、綱を腰につけて、海の中へ飛びこみます。さうして、海綿を見つけると、手ばやく、小刀で切りとって、綱をひきます。それをあひづに、船の人は、急いでその人を引きあげます。」

「それが、すぐに、石板ふきになりますか。」

「いいえ、とりたての海綿には、肉がついてゐますゆゑ、それを砂の中に埋めておいて、よく肉をくさらし、それから、くすりで洗はなければ、石板ふきにはなりません。」

太郎は、持って居る海綿を見ながら、「目もないし、耳もないし、口もなければ、手もない。なんと、をかしい動物もあるものだ。」とひとりごとをいひました。

第十五課　富士登山　(一)

富士山に登るには、毎年七月の初めより八月の中頃までをよしとす。これ、その頃に至れば、山上の雪も、あらましとけて、寒さも、大いに減ずればなり。

登山の道に四つあり。その中、人のもっとも多く登るは、駿河の須走よりする道なり。

須走にて、強力をやとひ、これに荷物をおはせ、二里ばかり進めば、一茶店に達す。これより上は、道けはしくして、馬通はず。故に、て

昇降。

てを馬がへしとよぶ。

一里ばかり登れば、金剛杖を賣る處あり。金剛杖とは、八角の長き杖にて、山を昇降するに、かくべからざるものなり。

さて、金剛杖をつき、強力に導かれて、やう

室

やく登り行けば、そのあたり、一面に灰色の砂地にして、別に定まれる道なし。

やがて、大石をつみて壁と屋根とを造れる一の室につく。ここを一合目といふ。これより十四五町ごとに、石室あり。二合目、三合目とかぞふ。

登り登りて、六七合目辺に至れば、道、はなはだけはしく、のぼることはめて困難なり。また、空氣も、次第にうすくなりて、呼吸せまり、あせ、玉をなして落つ。されども、しばし立ちとまれば、寒さ、たちまち身にしみて、ほとんど、たへがたし。

困難

呼吸

八合目辺に至れば、大抵、日暮に近づく。よりて、ここなる石室にとまる。石室の内には、ただ、板とむしろとをしきたる床あるのみ。寒さ、ことに強きゆゑ、火をたきて、あたた

床

薄

まる。されど、空氣薄きがため、新、よくはもえず、また、飯もよくは煮えずして、味、はなはだまづし。

第十六課　富士登山（二）

翌朝。

翌朝早く起き出でて、四方を眺むれば、山下は、なほ暗くして、ただ、かすかに、東方の白み渡るを見る。

程なく、白き處、やうやう、淡紅となり、深紅となり、あるひは紫色となり、黄金色となり、

旭

つひに、きらきらと、旭の昇るを見る。

霞

このとき、遠近の山々は、雲の間より、その頂をあらはし、次第に、霞のはれゆくにつれて、そのふもとさへ、やうやくあらはれ、天地、まったくあきらかとなる。

日の出を見をはりて後、九合目を過ぎ、頂上に達す。はるかに下方を望めば、四方の山山は、あたかも、ありづかの如く、大小の湖沼は、ほとんど、泉水の如し。また、河水の流れ行

沼

く様は、さながら、白き絲を引けるに似たり。さらに、南の方大洋を見れば、水は遠く天に連り、ひろびろとして、その限りを知らず。

噴火。

頂上には、昔の噴火口のあとあり。今は、烟もたえて、内に、千古の雪あり。めぐり、およそ五十町許り、八つの峰、劍の如く立ちて、これをかこむ。穴の傍に、二泉あり。一を金明水といひ、一を銀明水といふ。

周

頂上を一周して、山を下れば、足は、進みてとどまるところを知らず、わづかに半日にして、ふもとに達すべし。

富士山ノ頂上ハ、夏デモ雪ガトケヌクラヰニ寒イユエ、七月ノ初カラ、八月ノ中頃マデノ間デナクテハ、頂上ニ登ルコトハ出來ナイ。

富士山ニ登ッテ見ルト、四方ノ山々ハ、アリツカノヨーニ見エ、湖ヤ沼ハ、泉水ノヨーニ見エル。マタ、川ノ流ハ、チョード、白イ絲ヲヒイタヨーデアル。コレニヨッテ見テモ、山ノ高クテ大キイトイフコトガ、ヨクワカル。

第十七課　遠足に友をさそふ

學校の休業中は、學問の勉強よりも、運動の方が大切であるとは、かねて、先生から申されてをることであります。ゆゑ、中山・河野の兩君と相談して、明後日、川上地方へ遠足することにとりきめました。途中で、公園を見物したり、諏訪神社を拜したり、また、山に登って海をながめたり、瀧つぼに入って、暑さを流したりしようとい

ふもくろみであります。おさしつかへがありませんなら、御一しょにお出かけになってはいかがでありますか。その日は、朝四時に、私方でうち揃ふはずであります。ゆゑ、それも、御承知をねがひます。

八月十五日　瀧澤一郎

園田勇吉様

返事

わざわざのお手紙で、まことにありがた

宅

うございます。學校の休業中、宅にばかり居ては、からだの爲にもわるいゆゑ、どこかへ出掛けたいと考へて居たところへ、

賛成。

御遠足の御もよほして、私も、大賛成であります。とりわけ、川上地方へとのおとりきめは、

至極。

至極よろしいとぞんじます。その邊には、富士の

裾野。

裾野までも見られる景色のよい處があると聞いて居りますゆゑ、ぜひ、一度は、いって見たいと、かねて思って居た所であります。只今、父は、るすでありますから、母にききましたところが、「天氣がよかったらゆけ。」と申されました。貴君始め、中山君・河野君なども、別に、おさしつかへがありませんなら、雨天であったら、日おくりとおきめなさって下さい。

八月十五日　園田勇吉

瀧澤一郎様

第十八課　小柳

今ヨリ四十年アマリ前ニ、あめりかカラ、ぺるりトイフ人ガ、ハジメテ、ワガ國ニ來タ。ソノ時、ワガ國カラ、五斗入ノ米二百俵ヲぺるりニオクッタ。

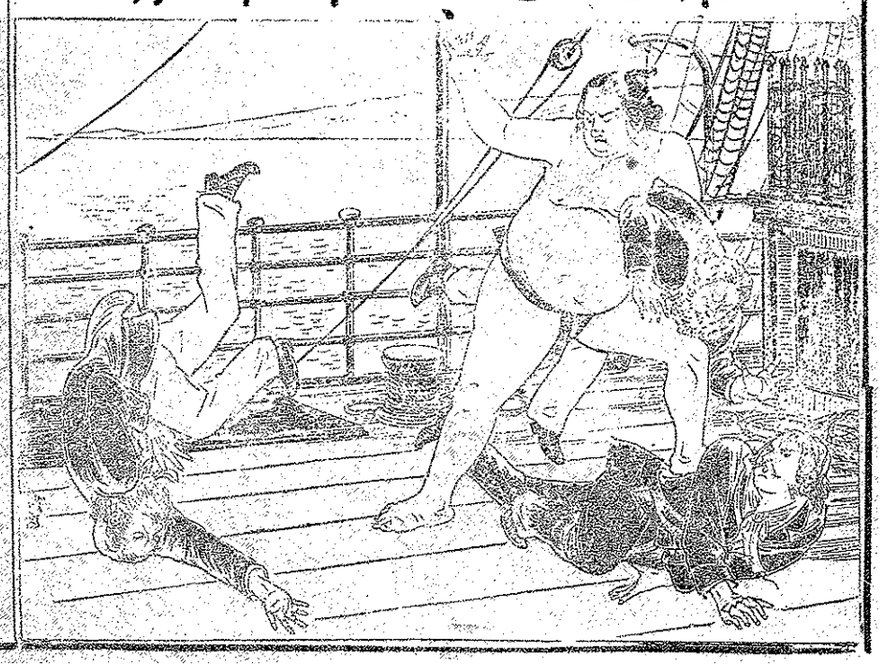
コノ米ヲ運ブノニ、車ヤ馬ハ用ヰナイデ、ミナ、角力取ドモニ運バセタ。

ソノ角力取ノウチニ、小柳トイフモノガアッタ。コノモノハ、俵ヲ、背ニ六俵、頭ニ一俵ノセテ、ソノ上、一俵ヲ、手玉ノヨーニ取リナ

夢

ガラ運ンダ。

ぺるり等ハ、日本ニコンナ強力ノ人ガアルトハ、夢ニモ知ラナカッタユヱ、實ニ驚イタ。ケレドモ、あめりか人ノ中ニモ、ズイブン、強力ノモノガアッタユ



幾

エ、小柳ト、ドチラガ強イカ、タメシテ見タイト思ッテ、三人ノ大男ヲエラビ出シテ、「サア、カクラベヲシテ見ヨ。」トイッタ。

小柳ハ、あめりか人ナドガ、幾人來ヨウト、決シテ、恐レル男デナカッタユエ、快ク承知シテ、ソノ三人ヲ、私一人デ相手ニシマセウ。」トイッタ。

べるり等ハ、三人ノあめりか人ガ、小柳ヲヒドイメニアハセテ、コーマンノ鼻ヲヲルデアラウト、大勢ノ人ト、勝負ヲ見テヰルト、小柳ハ、一人ヲ脇ニハサミ、一人ヲ下ニフミツケ、マタ、一人ヲカタ手デ高クサシ上ゲテ、遠クヘナゲテシマッタ。

勝負

脇

べるり等ハ、大ソー、小柳ノ強カニ驚イテ、「あめりか中ニ、トテモ、アレホド強イ人ハアルマイ。」トイッタ。

大膽

第十九課　大膽なる少女　(一)

昔、アメリカのある都の町はづれに、ケー

窓

トといふ少女、父と共に住み居たり。

ある暴風雨の夜、父は、他に出でて、おそくまで、歸り來らざりければ、ケートは、待ちわびて、窓の戸をほそめに開き、一心に、外の方を眺め居たり。

その時、ごーごーと音して、やみの中をつき進みつつ來る一點の火光ありき。これ、うたがひもなく、汽車の進み來れるなり。

河

然るに、汽車が、河のあたりにさしかかりしと思はるる頃、すさまじき物音きこえて、火光は、見えずなりたり。

ケートは、變事のおこりしにはあらざるかと、子供心にもあんじつつ、これを見とどけんとて、ただ一人走りゆきたり。

影

ケートは、河岸にいたりしに、こは何事ぞ。常に見る橋もなく、來りたりと思へる汽車は、影だに見えず。あはれ、橋は、大水におし流されしを、それとも知らざりし列車は、あま

列車。

客

たの客をのせたるまま、進み來りて、むざんにも、河に落ちたるなり。

第二十課　大膽なる少女　(二)

かくと知りたるケートは、そのままに家に歸る心もなく、いかにもして、次なる列車を救はんと、停車場さしてかけつけたり。

救

隔

停車場は、河より一里ほど隔たりをり、その間には、又、河ありて、せまき橋、これにかかれり。晝すら、渡るにあやふきを、まして、風雨すさまじきやみの夜に、燈火もなくて渡ることとなれば、ケートの困難、いかばかりぞや。

されど、ケートは、かかる困難をものともせず、橋の上をはらばひて、つひに、

停車場に達し、今や、列車の發せんとするを見て、「橋落ちたり發車を止めよ。」とさけびて、そのまま、いきたえたり。

發車は、止められたり。少女は、よみがへりたり。すでに乘りてみたる老幼男女幾百千人の生命は、この少女によりて、助けられたり。ゲートの名は、これがために、遠近に聞こえて、到る處にほめたたへられたり。

老幼
助
到

昔、あめりかニ、けーとトイフカンシンナ少女ガアリマシタ。アル雨風ノハゲシイ夜、けーとハ、タダ一人、停車場ニカケツケテ、大水ノタメニ、汽車ノトホル橋ノ落チタコトヲ知ラセマシタ。ソレガタメニ、汽車ハ、川ニ落チルコトヲマヌカレ、幾百人ノ乘客ハ、アヤフイ命ヲヒロヒマシタ。

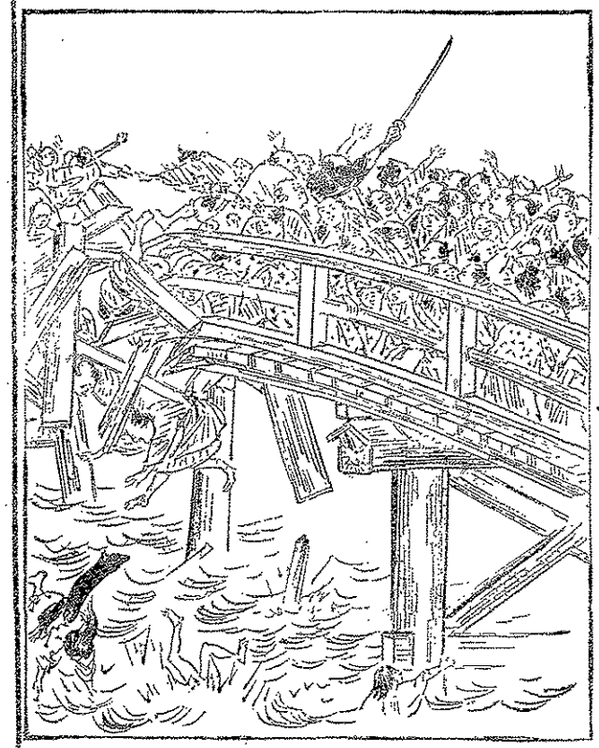
智恵。
題

第二十一課　智恵のはたらき三題

昔、江戸の富岡八幡（ハチマン）の祭禮に、永代橋の上が、人でふさがってしまったことがあった。そのとき、みりみりと、すさまじい音がして、橋の中ほどが落ちたので、橋の上の人々は、

倒

しょーぎ倒しに、川へ落ちた。それとは知らぬうしろの人々は、ずんずん、おしよせて来て、みな、川の中へ落ちこんでゆく。



抜

この時、一人のさむらひが、太刀を抜いて、一ふり二ふりひらめかした。すると、橋の上の人たちが、「それ、けんくゎだ。」やあ、人殺しだ。」とさわいで、みな、後にひき退いた。これがために助かったものが、幾千人だか分らんほどであったといふことである。

救

退

昔、支那に、司馬温公といふかしこひ人があった。この人が、まだ、をさない時に、多くの子供等と、大きな水がめのふちで遊んで居た。ところが、その中の一人が、あやまって、か

投危

めの中に落ちた。

温公は、驚いたが、すぐ心づいて、大石を持ち上げ、うんと力を入れて、かめに投げつけた。かめはわれる。水は流れ出る。落ちた子供は、危い命をひろったといふことである。

昔、ある國に、ソロモンといふ王様があっ

鉢

たこの王様が、ある時、隣國の女王をたづねてゆかれた。その時、女王は、二鉢のばらの花を持ち出し、王様に向って、「このばらの中の一鉢は、造花で、一鉢は、眞の花でありますどれが眞の花か、あてて御らんなさい。」といはれた。

王様は、何の答も

舞

せずに、つとたって、窓の戸を開かれた、すると、蝶が、ひらひらと窓から舞ひこんで、一鉢の花にとまった。そこで、王様は、「あれが、眞の花であります。」と答へられたといふことである。

狐と烏　森

第二十二課　狐と烏

むかしむかしある森の
高きこずゑのその上に
肉のひときれくはへたる
鉞

一羽の烏がとまりゐた」
そのとき下を通りゆく
鉞ゑつかれたるやせ狐
これを見つけてどうかして
その肉取らうと考へた」
かれに空とぶつばさあり
我に飛行のてだてなし
しかたはないか待てしばし
ここにありあり一思案」

思案

狐は聲を細くして
　烏に向ひいふよーは
久しぶりなるわが友よ
　見わすれたるかこのわれを
君が羽色のうつくしさ
　君が目つきの愛らしさ
昔にまさるそのすがた
　たぐひまれなる
そのかたち

歌曲

ことに上手な君が歌
　久しい間聞かなんだ
ぜひ一曲をこのわれに
　聞かせてたまへわが友よ」
烏はこれを聞きとりて
　とびたつばかり喜んで
さらば一聲聞かせうと
　首をのばし羽ばたきし
かあと一聲鳴きし時

孤

思はずおとす口の肉
孤すかさずはせ寄りて
舌うちしつつ食ひたり」
ばらの花にはとげがあり
紅の菌には毒がある
やよへつらひの言葉には
いつはりありと人よ知れ」

新編國語讀本　高等小學校用　巻一　終

明治三十四年六月廿五日印刷
明治三十四年六月廿八日發行
明治三十四年八月四日訂正再版印刷
明治三十四年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本高等小學校用

定價
巻一　金二十錢　巻五　金廿二錢
巻二　金二十錢　巻六　金廿三錢
巻三　金廿一錢　巻七　金廿四錢
巻四　金廿一錢　巻八　金廿五錢

飯田

不許複製

著者　小山左文二
著者　武島又次郎
發行兼印刷者　東京市日本橋區吳服町壹番地　株式會社普及舍
代表者　右社長　山田禎三郎

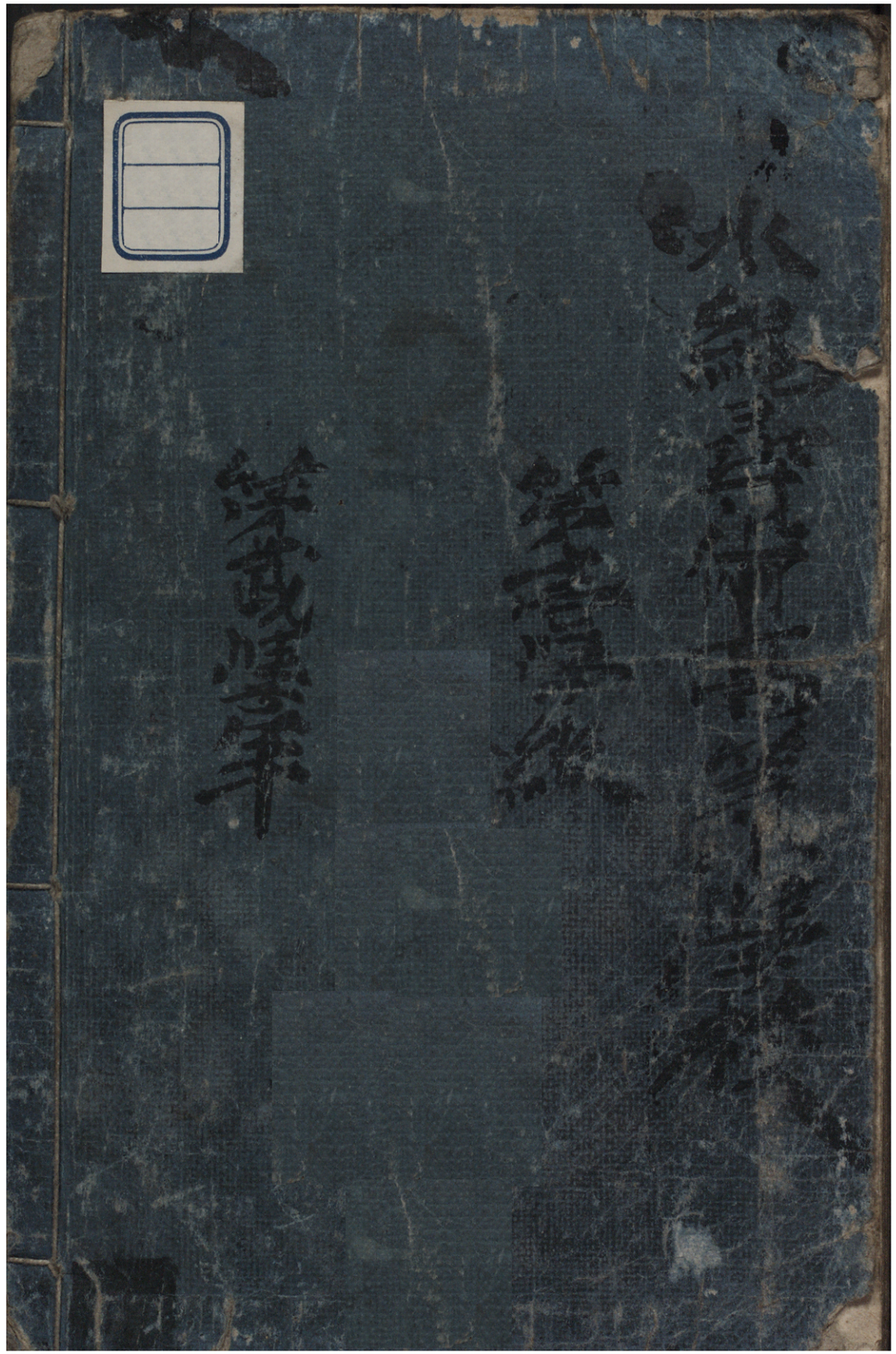
發賣所　東京市神田區南乘物町十番地　帝國書籍株式會社

注意

(一)本社出版の書籍は尊ら堅牢ならんことを期し常に紙質を撰び調製に注意致し居り候へども多數の中或は粗製のものなしとも申しかね候。萬一かくの如きものこれあり候はば御手數ながら御注意を願はしたく候然る上は必ず無代價にて堅牢なるものと御引換申すべく候

(二)本社出版の書籍はいかなる僻遠の地方にありても定價を超過して賣り捌かしむることとなく候。もしこれに相違の事實御發見相成り候はば御一報下されたく候

(三)本社出版の書籍は本社へ直接御註文の分に限り書籍部數の多少に係らずその運賃の不拂を本社にて負擔いたすべく候


水戸藩評議
笑草紙
諸藩政策